

第3回志津川湾保全・活用計画策定委員会 議事録

日時：2021年10月18日(月) 14:00～17:00

会場：自然環境活用センター 交流室

出席者：阿部富士夫委員長、佐藤太一委員、菅原きえ委員、阿部民子委員、大沼ほのか委員、阿部将己委員、工藤真弓委員、高橋直哉委員、鈴木卓也委員、鈴木孝男委員、阿部拓三委員、畠山桂委員

事務局：及川主任、鈴木研究員、太齋・山崎（サステイナビリティセンター）

及川主任より挨拶の後、住民向けワークショップの延期、計画策定期間の前倒し等の事務連絡を行った。

□事務連絡

・新型コロナウイルス蔓延防止期間中に付き、周知期間がとれないことから、10月10日(日)に予定されていたワークショップは年明けに延期とする。

・本計画の策定期間について、パブリックコメントの実施などの都合により、前倒しをしたい。第4回委員会を10月18日(月)、第5回委員会を11月16日(火)とし、ここでなんとか仕上げたい。

阿部委員長挨拶の後、議事に入った。なお、阿部委員長は都合により途中退出されるため、その後の議長は副委員長の工藤真弓委員に引き継ぐこととなった。

□議事

志津川湾保全・活用計画の目標（将来像）について

- ・目指すべき将来像
- ・具体的な目標と評価指標

○志津川湾の将来像について

前回委員会の内容をまとめた資料を元に議論を行った。

◇計画期間の確認

・計画期間は10年。毎年評価し、3年ごとに評価改訂、最終年度で次の計画策定を実施

◇範囲の確認

・現在のラムサール湿地の範囲に折立・水戸辺などの干潟も入れる。陸域についても言及する

◇保全・活用計画将来像の5つのカテゴリー案について

事務局：5つのカテゴリー案として見たが、妥当性はどうか？

- ・「うるおい・やすらぎ」が抽象的で、薄いのではないか。
- ・遊び学びや、文化宗教に吸収してはどうか。
- ・他の項目が達成されたときに出てくる感情であり、結果的に生まれるものではないか。
- ・自然環境に対して安らぎを感じたり、生業が上手くいけば喜びを感じるし、文化・環境の上にすごく大きなもののような気がする。
- ・そういう意味では項目に階層があるのではないか？自然環境や生物が土台にあって、そこに生業とか遊びとか文化宗教とか、最後上に感情としてうるおい・やすらぎに繋がってくるという。

事務局：自然が一番ベースで異論はないか？一番上が文化宗教か、うるおいやすらぎか？

- ・一番上がうるおい安らぎ。のこりの3つが中間に入るのではないか。
- ・産業・文化宗教・遊び学びというのがあって、潤い安らぎに。
- ・自然環境が土台だから。ピラミッド型か。
- ・文化宗教を真ん中にその横に、生業産業と遊び学び。それを正三角形を互い違いに並べてはどうか。
- ・今回議論しているのは保全・活用計画なので、自然環境の保全が下にあり、その上に、産業や生業や学びがある。文化宗教は全然時間軸が違って過去からずっと繋がる伝統的なもの。文化とか宗教は上に乗るものじゃなくて、その裏をずっと繋がって、そういう背景を支えている。だからその背景の中に文化とか宗教入れるとなんとなくちょっと違ってきて、もしやるならその上の潤い安らぎのところと一緒に、伝統とかなんかを維持しつつ個人の潤いとか安らぎがちゃんと生まれてくるような社会。だから文化宗教とか安らぎが一番上に乗せるか、もしくは文化宗教とかは時間軸が全然違うんで図示しようとするやりづらいかもしれない。文化・宗教はちょっと違うかなと。
- ・例えば大きな丸の中に支えるがあって、それが文化と宗教。その3つをくるんでいる形はどうか。
- ・全部をくるんでるでいいのではないか。文化宗教があってそれを大事にするものがある

って、その結果潤いとか安らぎを得られる。文化とか伝統っていうのは将来的にもっと時間がたてば新しい文化とか生まれるかもしれないが、民俗芸能であったり寺社の営みというのは過去からずっと繋がっているものなので、それをきちんと大切にする社会がその中に一本通っていけばいいのでは。

事務局：この10年でやっていくのは、産業や遊び学びみの3つをしっかりとやるというイメージか？

・安らぎや文化宗教は、今回の保全策では前置きのところにどーんと出てきて、そのためにやらなきゃいけないことは何なのか言えば、保全策とその上に乗っかる学びとか生業を具体的に、何をどうやったらできるのってことを作らなきゃいけないのではないのか。

・一番上の三角にうるおい安らぎプラス文化宗教を入れてしまう。

・その方がやりやすいんじゃないか。この10年で文化・宗教をどうこうするということではないのでは。

・多様性を認める社会というのは短期の目標としてもありえるのではないか。

・プレーヤーとしては文化宗教も日常生活の中に入っていると思うし、神事を含めて日常でやっているわけだから、あえてそれを分けるのはどうか。上にあげるのも納得は行くが、逆に中に入れたほうが面白いかなっていうのはある。具体的な政策としては政治的には難しいかもしれないが、行動の中から意識してできることはあるのではないか。

・中断したものもあるが、改めてまたスタートさせるという意味ではアクション出来るところはあるのではないか。

・そこは町民が震災の後に気づいたり感じた部分。生業とか学びとか自然環境は震災前もみんなやってきたけど、結局そこを震災後気付いた部分でもあるから、なにか言葉にしたい。

・意識したということを残したい。全部繋がってる、やった結果として得るものが潤いとか安らぎとか文化になっていくということであるが、それが遠くじゃなくてやりながら向上していく。全部の面で向上していくイメージ。

・図だと、2段目までが我々が介在して行動する範囲。その結果が一番トップの三角。

・文化宗教という書き方じゃなくて、例えば生活に根差した文化とか。そんな風にすれば入りやすいかもしれない。

事務局：宗教は確かに異論は出やすい。あえて入れるかどうかはこの場の議論次第か。文化は異論がないように思うが、うるおい安らぎというのは結果のような気がするので、目指すものがそれでいいかというところではないか。

・そういう側面があるという意味で出したので、それだから何かをするというよりは、

そういう側面もあるということ。

・それが得られる前提としての生業産業だったりなので、現実間違いではない、それでいいとは思いますが・・・。

事務局：この状態になれば全てオーケーか。

- ・生活に根差した文化になればその中に潤い安らぎとかが入るのでは。
- ・潤い安らぎが曖昧で議論しにくい。要素の1つであることは間違いはないが、もうちょっと全体の言葉を作った方が良い。潤い安らぎを含めたトータルした言葉。
- ・文化はすごい広い表現なので、区切るのが難しい。学びも文化に含まれる。潤い安らぎも文化に含まれると思う。でも便宜的に分ける考え方はありだと思っていて、真ん中に文化があって両サイドとリンクしているという意識があればありなのかなと。自然の方にも食い込んでくるし、はっきりは分けられないものかと思う。

事務局：結果としてこれが最上位の状況なんだと皆さんが同意すれば、それは置くことに無理はないかと。

・10年後のビジョン、状態、究極の言葉。目指すところ。持続可能？

事務局：うるおい安らぎがあれば必要十分か。他に何があれば、どういう状態であればいいか？

- ・逆に言うと生業とか遊びが高まったり、充実してればいいと思うが、潤いとか安らぎが感じられずに産業だけが発達するのは駄目。
- ・あえて目的を絞った目標にする、色々そぎ落とした目標を書く。計画書の目標、この計画書の目標というところに絞って書く。潤いとか安らぎも入ってくるけど、「この計画書ではここです。下の2段までやることでこれが達成できます。」と。

事務局：意欲の部分で、それだけで大丈夫か？

- ・あと食の豊かさとか。
- ・普段子どもたちとプログラム一緒にやっていて、最終的な到達点、感じてもらいたい部分は誇り。地域の自然に対する誇り。安らぎ喜びなつかしさ。言葉を加えるなら誇りとか親しみというところが到達点としてあると、下まで繋がっていくようなイメージが持ちやすいのかなと。

事務局：前に進めるよう前向きになれる部分も必要ということか。潤い安らぎ誇り。そこを目指していくというか？

・例えば契約講とか絆とか共助とか、震災後こういうことがあってやってきたということが結構いっぱいある。そこはなかなかめんどくさいというか、億劫だという意見も多分あるだろうし、非常に難しいところはあるが、実は、その辺は欠かせなかった非常に大切なものなのではないか。

・10年後の姿は必要だが、今考えているってことは10年に限らずもっともっと先のこ
とまで踏まえる話。10年後が来た時に昔の人はこうやってやってた、ちゃんとこうし
て町を復旧したんだよみたいな一つになるともっといいのかとおもう。

・住み続けられる町でなければならない。話が全然違う方向だけど。住みたいって思う
し、住み続けたいって思わないと。全世代、全時代で。

事務局：仮に誇り繋がりにしておくか。文化は？いったん宗教消すか？

・信仰とかではだめか？

事務局：宗教と信仰はレベル感としては変わらないかもしれない。

・生活文化

・精神

・伝承とか、伝統とか。

・歴史文化。

・文化社会。伝統にしてしまうと何か、新しい伝統みたいなのが入ってくる気がする。
昔からのばかりでは駄目みたいな。

・子供ラムサールっていうのをやった時に同じような議論になり、その時にこども達が
選んだ言葉が歴史文化だった。その時に新しい歴史を作るという考え方もあるのかと思
た。言葉は見る角度によって感じ方も全然違ってくるのですごく難しいが、どれが良い
のかと思ったときに、やっぱり10年後にこのみんなですべてレジェンドを作るという観点
からすると、歴史がじっくりくるかなと感じている。

・伝統だの歴史だのどうのこうのというのは前置きにどんと書くべき。志津川湾保全活
用計画を策定する、その活用計画の中にそれがぼんと入ってくると思えないので、何を
目指して活用計画を策定したんだというところで、伝統文化とか色々な生活とかそうい
ったものを並べて使って、志津川湾モデルとかモデルを構築したいと。そのモデルの中
身ってなんなんだっていうことをやっていくとわかりやすい。この議論は志津川湾の計
画をやるのか南三陸町のことをやるのかどっちなのというところ。

タイトルが志津川湾のとなっている。海を保全して、そっちの方を強くやるべきもの。
志津川湾を保全するには陸域とか山とか川との連続性も大切だしそういったところも
保全するのは当然必要だよと、そういった前段階に伝統性とか生活文化とかを述べ、で
志津川湾をどう保全してどう活用していくのかを考えればこうですよっていうのを持
ってくればいいと思うが。だから歴史文化潤い安らぎ誇りを志津川湾の保全のなにをす
るのという中にあまり入れ込みすぎると、中々手が出せない。まとまりが得られない感
じを受ける。

・一番底辺の自然の関係はやはり多いので、歴史とか入っていくと結局時間的に難しい

かなと思う。自然の部分でどうしたらいいか話題を変えていくのもありなのかな。上の方ばかりやってると中々進まない。

事務局：では一度ベースから議論することに。

中身はかなり沢山ある。自然環境を整備するにしても、わりと難しいこと、実現が難しいことも書いてあるるので、具体的にどう現実的な目標にしていくか。まちの距離感・規模感を生かした先進的な取り組み。これはワイズユーズモデルと一体なのかということもある。海と山の関係が良くなってくとか、環境を守り活かすグリーンインフラが主流になっている。これはきっと復旧工事の評価含めて、あるべき復旧の姿とかあるいは復興で失われた自然をどう再生するかとかいうあたりの話。次世代にバトンタッチできる開発の少ない土地、養殖に適した漁場がある。これなんかは自然環境に入れていいのかどうか。養殖も自然環境に適した土地が無いといけない。戸倉の環境配慮型養殖が当たり前となっている、プラゴミの汚染が減少している、流域のつながりを重視した一体的な保全策が機能している。それから、生物多様性の関係で行くと、多種多様な生物が存在している。これは温暖化を意識しての話だと思うが、生物種が入れ替わっても多様性が維持されている。それから干潟が条約湿地の範囲に入っていないが、干潟こそ貴重な生物のいる場所の1つでもあるので、それも入れ込んで守っていこうということ。あと藻場がどんどん減っている中でどのように保全していくか。このあたりのようなことが皆さんから出ている意見。

・藻場の現状なんかは分かっているのか？

・2年前に全域の調査をやって、大まかに把握はしている。モニタリングの調査の第1回目をやって、今後例えば来年2回目をやれば減ったかどうかでも評価出来る。

・藻場で選ばれてる場所なので、どこにどんな藻場があって、それが現状どうなって、過去と比べて今良くなってる悪くなってる、そんなベースがないとなんもならないので、基本的な情報として必要。

・湾内でもどこが主要な藻場かっていうのは把握できるのでそういうところに焦点当てる。

・魚の情報はどうか？

・魚種が今、目まぐるしく入れ替わってるので、調査中。

・現状しっかり把握しておいたうえで10年後を目指すのであれば、モニタリングがしっかりと行き届いていること重要。それが分からないと対策が打てない。そういったことがちゃんと機能していることが大事。

・それは多分漁業とも絡んでくるんで養殖業とか色々なもの、例えばいかだも密度を減らしたとか良い方向に舵は切られてるんだけど、ほんとにそうなのか。多い少ないだけじゃなくていかだの下にヘドロが溜まりやすいとか、環境的にどうなってるのかってあ

たりも見ておかないといけない。

- ・モニタリング体制を作り、年一とかで調査することを基本とする。そういう方法論を作れば良い。

- ・自然環境活用センターそのものがそういう機能役割としてあるはず。20年後30年後40年後に自然環境活用センターが存在することを保証していかなければならない。

- ・それを明記すれば良い。FSC認証の場合でも年一回の内部モニタリングをして行くというマニュアルを作り、守っていくという認識を持っている。基本的な部分はそういう風にルール決めしていくのが良い。

- ・一番大切なのは人材の確保。干潟調査でも担い手の高齢化が進み、次期それをやってくれる人の確保が大きな問題になっている。例えば絶滅危惧種が分かる人が絶滅状態なので、あの人がいなくなったら何が絶滅危惧種かわからんみたいなそういう状況にもなっている。南三陸くらいの町の規模だと、次世代に渡していくということをみんなで取り組んでいける。仙台くらいになるとそう簡単にはいかない。遊び・学びの中でそういったモニタリングとかできる人材が育つのが理想。

- ・モニタリングに関して、行政の財政を預かる部局などでは、一回調査して分かったからもういらんだろと、そういう発想の方も結構いらっしゃる。

- ・定期的なモニタリングが必要だと明確に書かないと、予算の議論まで持ってけない。

- ・水族館とか動物園、博物館についても展示施設なので、研究員はいらんだらうと考えがち。そういったところでは常時管理して研究していく研究職が必要だということと同じように、モニタリングの人材の確保とか、お金をかける必要があるんだということは言っていないと、その点が行政の人はずなかりにくい。

- ・干潟部分も登録湿地の中に加えることが必要だとすれば、干潟の再生産や干潟の評価の話が必要となってくる。

- ・磯も含めて全般的に入れるべきだが、限られた予算と人員ならば、トピックになるようなところをピックアップしてモニタリングして行く必要がある。ラムサール条約での主要条件でいえば、志津川湾では藻場だろうし、加えるならせつかく高校生がやってきた干潟であろう。

- ・松原海岸の多様性が高いのは、結構磯の生き物入って来てるという理由がある。場って言った場合に藻場については、海草のアマモ場と海藻藻場をきちんと分けてやっていく必要がある。

- ・リアス式海岸の特に南三陸町の干潟は、砂泥が溜まっている干潟的環境の周りに磯と藻場があるので、干潟と言っているけれども磯と藻場を含んだような特殊な環境になっている。だからこそ貴重。

・志津川湾には広大な干潟はないが、小さい干潟が飛び石のように存在していて、それが全体としての多様性を維持しているということは明らかになっているのでそれは大切。ただ、震災で干潟が沈んでしまって中々戻ってこないとか、それから防潮堤の下になってしまった葦原みたいなのところもあるので、今後どのように自然の営みの中で回復していくかというのは見ていかないといけない。

・水戸辺川の河口がコンクリートで固められてしまう前に、生きもの他に移したが、それも全部飛ばされて何もなくなって、これはもう駄目だと思った。近年になってわきのところに砂泥が付いて、狭い中に非常に貴重な生き物がいる。どこにどんなものが出来てくるかはわからないので、その辺をしっかりと見ていく必要がある。大切な干潟、重要な干潟、多様性の非常に高い干潟が何かというのを見て、しかも藻場とか磯とかと連続的な繋がりがあるところがやっぱり多様性が高いので、全体を見まわした中で、ここは多様性が高いホットスポットだと言うことが出来る。将来的なホットスポットをいくつか見つけ出してそこをきちっとモニタリングしてやってというのが、具体的にはやりやすいかもしれない。

・コクガンの名前がないが大丈夫か。

事務局：これは中々たくやさんが出してくれないから

・現在コクガンのモニタリングは町の予算でやってる。ラムサールの登録要件になったものでは、オオワシ・オジロワシがある。あれは越冬のために訪れているので、温暖化の影響をもろに受けていなくなれば、それがいなくなったから志津川湾の環境が悪くなったとは言い切れないので、選ぶならコクガンで見るべき。コクガンに関しては温暖化が進むよりも餌になるアマモがあるので来てるという部分が大きく、温暖化してもいなくなるということはないと推測している。

・コクガンは仙台湾にもいるんですけど、警戒心が強い。志津川湾のは、あまり警戒心がない。警戒心を持たなくてもいいような場所なのかもしれない、そういったことを表に出して、関係を持続していきましょうという表現もできる。

・震災前は志津川湾でも警戒心強く、船が近づいていくと警戒鳴きしてみんな飛んでいた。震災後、船着き場や漁港施設が壊れ、コクガンが餌があって人がいないので入ってきた。その後漁業活動が再開していく中で漁業者の人が追っ払ったりしない、ちゃんと見守ってくれたので、コクガンたちもあの人たち大丈夫となった。だから震災前の調査の時とコクガンの人に対する警戒心は全然違う。

・近く行って観察できるしすごくいい。だからああいう関係をどうやって維持できるか、コクガンの保全にかけて一つのモデルを示せたらよい。

・見守ったとあるが、発信してくれたことで漁師たちにも知識があった。例えば藻場も干潟も守るためにはモニタリングって必要なのは分かるが、研究者にしか出来ないこと

だけでなく、一般の人たちは守るためにどう関わっていけばいいかという具体的な発信ができればよい。

一つは調査に一般の人たちが加わってもらうことは出来る。干潟では市民調査をやっている。最後美味しいもの食べようと言うと異様に沢山集まったりする。

- ・うちの子どもはいくが、サラリーマンとか全然海と関係ないような人たちも何か一緒になってできる簡単な事でも具体的な事でも、あるとよい。興味ない人でも関わられるような、全く別な方法、切り口から関わられるようなやり方があると、町民全体で関わられる。

- ・例えば山の人なら、山守ればとか、町に住んでいる人だったら町で何かすれば藻場にもいい影響があるっていう、そういう関わりやすい具体的なものがあるとよい。

事務局：ラムサール基金というのを作ろうとしていた。それは例えば水産加工の商品1つ売ったら基金になってそれを使って調査したり子どもを育成するような仕組み。

- ・知らず知らずに貢献してるみたいなの。

- ・この町でもシール貼ってブランド応援する取り組みをやっているのでは。

事務局：ラムサールのマークは作ったが、まだ具体的な使用方法が定まっていない。

- ・それがあればそういう活動もできる。

- ・人材育成そのものにもお金かかるので、その資金を得る仕組みを作っていきましょうというのを計画に入ればよい。

事務局：保全の観点で行くと、藻場・干潟・コクガンあたりはラムサールの要件なのでこれはしっかりやろうということで良いか。モニタリングをしっかりやって、モニタリングを出来る人材育成もしっかりやりましょうと。それに財源が回るようなこともなにか考えましょうということが良いか。

- ・絶滅危惧種でなくても、普通のものでも多く来ていて良く見られるとか、そういうのも地域の宝になる気がする。だからそういったものもノミネートして、志津川湾では良く見られるというのがあってもよい。コクガンが守ればいいっていうような発想じゃないところに落としこむのが必要かなと思う。

- ・絶滅危惧種を取り上げるのは、絶滅危惧が住めるような環境をきちんと保全すればその他大勢もちゃんと住めるから生物多様性が保持できるんだということ。絶滅危惧種だけを守ればいいということではない。そういった発想、全体的な豊かさをどう担保していくか保全していくかということが大事。

- ・陸域も含めて考えるなら、山ではイヌワシを指標としたいかなと思う。たまにやって来てくれる。

- ・海岸植生というのものもある。

・項目の中にプラゴミ汚染が減少している、という部分があるが、暮らしの中で海を感じたり、結果的に保全するっていう行為につながるような部分は、明確にいれていた方がよい。海に行って保全するだけじゃなく、暮らしの中で、保全するっていうことができる。落ちているマスクなりプラスチックなり、そういうのが全くなくなるのが10年後のこの町の風景だったらよい。そこをなんとかしたい。

・モニタリング方法に関していえば、毎年場所を決めてゴミ拾いをし、10年後ゴミが明らかに減ったとかと、そういう評価もある。

・そういうのをちゃんと掲げないと、意識的につながっていかない。

・温暖化の部分で、農業の視点からはこういう話があるとか、観光だったらどうだとか、色々な切り口で意見を募りまとめてみたい。

・そういう情報が発信される場があればいい。

・意見を募るとなると、喧嘩になる可能性もあるので、そこは漁業者の意見というよりは藻場と干潟を守るためには、という言い方がやんわりいけるかと思う。

事務局：何が目的かは明確にしないといけないのでは？その上で、どこでやるのか、作業部会みたいなものを作るのかということもある。発信することで変わることも確かにあるが、今回の保全活用計画にどのように入れるのか？予算をそういった場をつくり取ってまとめる？

・ワークショップみたいな場が設けられるとよい。

・計画期間の変更ということで、3年ごとに評価、改定する委員会を開いて、なんかそういう場を設ける。

・要は、この委員会の目的、目標をみんなで共有できていれば、おのずと次世代に引き継いでいけるようなアクションがうまれるのではないか

事務局：例えば、温暖化で増える生きものとしてアイゴがいる。背びれに毒の棘がある魚。

・ワカメとか食べてしまう。漁業者の中でコクガンにワカメを食べられたという方がいるが、たぶんアイゴじゃないかと思う。実際、最近、アイゴが増えていて、今年卵を持っているものも捕まった。西日本の磯焼けの原因はだいたいこれ。

・もともとどこに生息してるもの？

・これは西の方で、九州では磯焼けの原因はウニよりもアイゴが主。三重とかあつちのほうなんですけど、最近北上してきて。

事務局：草食性でおなか破くと臭いんで、上手にさばかないと。

これが南からどんどん上がってきて増えると、藻場とかわかめが無くなる原因になる。今、漁業者は情報を持ってないので、それをちゃんと皆さんにお知らせして、皆さんの目でも見てもらう必要があるかなっていう話をしている。

・どうやったら退治できるのか。

事務局：これはもう、増えたらどうしようもない。何十匹、何百匹とワーってきて、食べたらずいなくなるので、気づかない。そうなるとう藻場の存続も怪しい。たくさんの目で見ないとわからない。

・根っこから根こそぎ食うのか。

・カッターで切ったみたい歯形で、やわらかいところから食べていく。

・コクガンが疑われているが、ワカメはほとんど食べない。まして、ナイフでスパッとというくちばしの構造じゃないので。どう考えても違うが、濡れぎぬになってる。

事務局：温暖化を抑えないとどんどんやってくるのは確かなので、一つは抑える方向の話と、あと、来てしまっただからしょうがない、ではどうするかという話。新しい産業にもつながってくると思うが、例えば、阿部将己委員がやってる陸上でのマツモ養殖。それも一つの答えになってくる。そういう話をどうやって作っていくかっていうのもこの議題の1つでは？これは若者の定着にも関わる話で、産業が一つ衰退していけば、住もうにも住めなくなってしまう。

・フノリも取れなくなっている。

・親潮が弱いのでワカメも不安要素がある。三陸わかめの特徴はシャキシャキ感。南のワカメは、葉が2月でも劣化して、味噌汁にいれてもドロツとなる。このままでは三陸産のワカメというものがなくなってしまう恐れもある。

・生き物を相手にするのは難しい。ゴミを減らすのとはまた違う。

事務局：なんかしら、我々が手立てを持ってないと、お手上げじゃないですか。そこをどうするか。

・そうすると、温暖化で起こり得ることとか、それも何か情報共有するような、教育訓練の場じゃないけど。プレイヤーも含めて、その見える化じゃないけど、情報をどう伝えるか。

・陸上養殖をはじめたのは、あきらめというか、温暖化はどうしても世界的な話の課題なので、自然は基本うつろうので、やっぱりそのなかでコントロールできるようなことを自分達で創りだしてやっていかなきゃいけない、と考えたから。

・今、観光の方も力を入れていて、地域の漁業者も一緒に頼んで漁業体験をやり、あるものでまず収入得る方法を強化している。育ててる海産物の品質が良くても悪くても見るだけなんで、そういうので観光を使っている。

事務局：それも一つの適応策。しかも結構な人数を巻き込んでいらっしゃる。それは、どういう思いからか。

・生産量が落ちて、船の空いてる時間が増えたのもある。みんな同じ立場なので、団体受け入れできるよう協力してやっている。昨日も3艘使って180人受け入れたところ。陸のプログラムと9回転させた。

温暖化で獲れるものが、変わったとしても、それに合わせて今はこう変わりましたと見せるのが新しい観光の形で、売りになると思うので柔軟には対応できるのかなと思う。

・例えば紙芝居でみなさんの仕事を分かりやすく子供たち向けにお話したいと思うが、その中に何か学びの要素をいれたい。高校生がそれなりの人数で来町し、その場があるので、なんかせつかくならそこに波及させたい。

・南三陸で取り組んでいる持続可能なまちづくりを盛り込んで、海もないところからくる人が多いので、海を作るには山が、みなさんがいるところからまず作らないとだよ、というメッセージを発信できるような紙芝居をつくらなきゃと思っている。

事務局：漁業者が具体的に1000万の収入を得るという話があるが、歌津のワカメなら、これまでも結構あったのでは？

・今厳しくなってきた。

・後継者、担い手がない。漁協組合員の資格審査やっていると、やめる人が20人、30人にもなる。まあ漁業っていうか、準組合員で、開口にもいかない、年取ったからやめますとか。漁業でメシを食っているのは歌津でいうと270人ぐらい。それが3年後、5年後って、こう具体的に10年後って見たときには、すごい減る。ネガティブな話ばかりするが、結局は環境変わって温暖化、これに対応できるか。漁業で考えたらかなり厳しい。ただ海は空かせないからやれる人にやらせるような漁業になっていっている。国や県は海をあそばせねえから例えば企業化してやらせる方向になっている。実際は、県の方も担い手とか東京からいろんな人を募集し、唐桑とかでやっているが、やっぱなかなか厳しい。

このラムサールとか世界的にこれ受けて、観光でもなんでもいろんな人が来るようなことを町は考えているのか？

事務局：この場がまさにその場所では？時間も限られているので次の項目に。学びの部分は一番意見がでたところ。具体にはどこを目指せばいいか。海辺の町なのに海に行けないところ、ここはなんとかしないといけないか。

・安全性に配慮して、海へのアクセスを作らないといけない。あとインストラクターなり教えてくれる人ら。そういう人と一緒に行って入れるようなモデル地域を何箇所か作っておけば、近所でそのアクセスしやすいところであれば行ってみようとなる。

・当初、志津川地区まちづくり協議会で想定していたのが、松原海岸八幡川河口のセットバックしたエリアをそういう形で利用すること。松原の海岸がまず候補になるかと思う。あとフラットで潮が引いた時に面積が広くて安全な場所と言うと河口干潟なので、折立海岸はすごくいい環境、学びの場となっているのだけれど、復旧工事で細石を敷きつめたおかげであまり環境的にまだよくなっていないので、そこをいかに再生するかっていうのはまさに今取り組んでいること。

・長須賀海岸も町内でスナガニのいる数少ない場所。ナンヨウスナガニが入ってきてるかどうかが、ちゃんと調査しないとイケない。

・モデル地域にして海岸ゴミのモニタリングポイントとしてもよい。

・おっきいマップを作って、見える化しながらやってもいい。ここは藻場とか干潟のポイントで、側溝がここにあるとチェックしていく。わかっている人だけじゃなく、それってどこなのみたいなものが見える化する媒体。

・とりあえず松原海岸でガイドがついて安全管理しながら観察会をやり、それが各浜々で広がっていくとよい。

・松原は記念公園のそばなので、そこも含めても避難経路こうだよとわかるように示せたらよい。

・沿岸に出る時は何を気をつけなきゃいけないかをリスト化する。そうすると波伝谷でもできるし長清水でもできるし神割の横沼でもできるしって、広がっていく。

・環境省の生物多様性センターが、東日本大震災で被災したところで、多様性が残っているところでマップを作ってる。志津川湾も載っている。そういうのをベースにして独自のものを南三陸町ので作ってけるとよい。

・海岸を歩いてみるのはいいかもしれない。いろんなジャンルの人たちががやがやいいながら。

事務局：そこでいうとあの化石の街化石のまちづくりとか、ナチュラルリストを含めていろんなジャンルの人がいるみたいなところも大事だが、底辺拡大するためにはどうしたらよいか？

・小学校の教育。総合学習の時間とかを使って子供たちを外に連れ出す。子供たちは干潟での活動をすごく喜ぶ。

・町内小学校2校が折立海岸の干潟調査やっているが、とても好評。

・志津川小学校では5年生は森の話をするが、つながっている海の話は必ず最初にする。そのあと森へ行き、そしてスプーンをつくるというプログラムが定番になっている。5年ぐらいやると先生たちが変わっても実情を伝える意味・価値をわかってくれる先生が増えていく。それが継続して全体に、広がっていけばよい。

・ありがたいことに、南三陸杉とかFSCという言葉自体をみんなが知っている状態になるのを実感している。効果的ではあるかなと。

事務局：それはどういう目標にしますか。全学校でやっているみたいなことを書く？

・歌津も入谷も戸倉もみんな5年生はそれをやるようになっていけば、とても素晴らしい。化石の時間があるとか。いろんな分野で、全部の子どもたちが味わえる仕組みになっていけば、本当に研究者が生まれる街になるかなと思う。

・外に出るのがいい。総合学習で4年生がこれやって、5年生があれやって、6年生は取りまとめてで発表させるとか。そう言ったものを教育委員会の方もうまくやって、学校で積極的にやってもらえるようになればよい。

・教員にそういうことを指導できる能力がある人がまれにしかいない。講師派遣や簡単なプログラムを作って、それを学校ごとに合わせてアレンジしてやってもらおうと、やりやすいかもしれない。満潮なのに干潟の学習を計画しようとするのはよくある。たたき台を提示するのはあるかもしれない。

・学校単位でやるのは、確実性が高まるので、仕組みづくりがうまく行ったらすごくよい。町内の子ども達には、そういったことがあるんだよというアピールにはなる。それはそれでやりつつあとネイチャーセンターとか、山とか海だったりとか民間で色々やって、きちんとそれを町内の子に限らず、まあ県内とかでいいとおもうんですけど、そういう機会を増やす。

・本当に底辺拡大といったら、町内の子は無料で参加できるようにする。

・町の予算もあるだろうが、それとは別に自立した事業とか予算を埋めるような職が全体的に必要。学びに関してもモニタリングに関しても、それが大切だから財源を調達し、持続可能に回っていく仕組みも必ず必要。

・観光協会では毎年4000人以上の学生・生徒を受け入れている。志津川湾のモデルみたいなのがあれば、それを料金をいただくプログラムとして提供し、町内のどこかが主催の講師料としてお支払いもできる。旅行会社との営業の仕方とか、我々はスキルを持っているので、何か提案をできる場にもなる。

事務局：例えばその売上の1%を町内に回してもらおうというやり方も考えられるか。

・南三陸森林管理協議会では合板用に丸太を売った際には、FSCの取得、審査料の足しになるように0.5%を協議会に入れる仕組みになっている。

事務局：町内の子どもたちにそのラムサールの教育を行き渡らせる目標を作って、その仕組みとして、例えば0.5%教育旅行の売上を還元するとか、どっかからお金をそこにチャリンチャリンって貯めていくっていうことがあればできますよね。

・講師料として、ストレートに講師に落として、そこから町内の活動を行う団体に寄付する仕組みも考えられる。

・教育旅行＝学びの要素というか、本当に徐々に学びの要素が強くなってきている。流行りのSDGsもそうだが、学校の意識が本当に変化してきているので、せっかくならそれに乗っかってよい。志津川湾が本当に学びの教育旅行を提供できる場ですよとなれば、ますます人が増えるのではないか。さらに海も山も両方持っているという強みがあるし、観光協会も旅行業を持っているのでそこは信頼性が高く、旅行会社さんからも選ばれている。そこをうまく皆さんに乗っかってもらえばよい。

・もっと気楽に遊びに行ける雰囲気があるとよい。勉強します、学びます、だとちょっとハードル高い子もいる。ボランティア的作業の参加だよという、来やすい雰囲気もある。それで海岸に行って浜面白いなあという流れになってくれれば。雰囲気でフィーリングで楽しみたいだけの人も多くの人いると思うので、内容もいろんな層に対応できるように。なのでゴミ拾いはハードル低くよい活動。

・海辺に行く活動があったら必ず一つはゴミを拾ってきてもらうのもよい。子供たちにさかニを探しましょうといったら、彼らの中のカニは毛ガニやズワイガニだったりするので、小さいコメツキガニとか動いているのがわからない。だから現場行くことの大切さはある。

・自然体験の体験でなくても、ビーチバレーとかビーチアルティメットなど、砂浜を使ったあそびの時にプラスで自然に触れあえる。海に親しむじゃなくても全然違う遊びできている人でも自然に触れあえる

・生きものをベースにしたアクティビティはいろいろ出てくる。砂浜で落とし穴を作るといろいろな生き物が入ってくるからそれを調べてみるなど、色々知恵を出し合えばやり方もある。

事務局:そういうのも含めて、モデル地域で色々試してみるということか。残ったのは、文化宗教の問題。最初の議論で決着していない。歴史文化にしようかとか文化伝統にしようかとか色々意見が出ている。中身は多様性を受け入れるみたいのところとか、伝統的で歴史的な活動の価値が見直されているとか、いのちめぐるまちが文化になっているなど。

・いのちめぐるまちという言葉自体を意識して使うのも結構重要ではないか。ラムサールとか、そのロゴマークとかそういうのを使っていくとかそういうのを含めてみんなで使っていこうというのが文化につながりそう。

・トップの文言をいのちめぐるまちにしよう。

・まちの将来像そのもの

・それを海を通してみたらどうなるか。海を通してどう実現していくのか

事務局:前回の議論で残りは、やり続けられるものだけが機能していくということや、地域のネットワークが広がっているなどがあるがどうするか。

・教育のところで、学びの場として全国から人が集まってくるし、そういうノウハウも人材も含め、人材的なネットワークが広がっていくイメージ。関わり方は色々あっていいので、自由に研究者とか教育関係者が関わっていけるような、そういうのをイメージした。

研究者が一カ月、半年と滞在できたり、全国の湿地センターやネイチャーセンター同士で期間限定で研究者をトレードするなどあったら面白い。地域のネットワークのハブで

ある湿地センターとかネイチャーセンターの全国拡大版。仮に大学が設立されたら講師をやってもらえるのもよい。そういう人的交流が促されるネットワーキングを広げていくことは大きなメリット。学びのメッカとして機能していく上ではすごく機動的に働く。ラムサール条約のメリットは、そういうところ同士のネットワークがあるってところなのでそれをフルに使っていくのがよい。

事務局：最初に戻って、いのちめぐるまちが一番上のイメージか？文化宗教はあった方がよいか？本日一旦これをまとめてくるんで仮置きで、違和感あったら変えるということ。

- ・いのちめぐるまちが文化に近い
- ・内容読むと受け入れるとか当たり前の持っているというか、日常とか

暮らし？

- ・ひらがなならくらしで

事務局：次回はある程度、報告書の体裁でまとめてくるので、それをみて議論して頂きたい。

工藤副委員長より挨拶

・あっという間の3時間でまとめるということ忘れて楽しく学ばせていただいた。切実な部分、人口が減ってきているだとか、環境が止めようがないところまで深刻になっているところがあるが、諦めずに、アイデアを出し合っていくことで、理想とするものが現実に少しでもなっていくと信じてやるというのが一番大事。今日は大学の授業を受けているようなそれもすごく楽しい時間だったなと思って、こういう味わいを町民の皆さんも味わえるような未来になればよい。次回も引き続きよろしくお願ひしたい。

終了